

マリンライフ

[Vol. 290]



クサフグ産卵の様子



クサフグの産卵を観察する児童（中町小学校5年生）

地域の自然資源を教育に！

6月1日（月）、中町小学校5年生のみなさんが「さとうみ学習」の一環として、クサフグの産卵行動を観察しました。これは、「身近な海で繰り広げられる命をつなぐ神秘的な営みを子どもたちに見せたい」という担任の先生の思いから実現したものです。さとうみ科学館も、これまでの調査記録をもとに、今シーズンの産卵日を予測し、観察日を調整するなどの支援を行いました。

当日の満潮時刻は午前9時40分頃。こどもたちは9時過ぎに産卵場所となっている海岸へ移動しました。到着した時には多くのクサフグが群れをなして集まっていたましたが、まだ産卵は始まっていません。クサフグは周囲の変化に敏感なため、刺激を与えないよう静かに見守りながら、その瞬間を待ちました。

「本当に見られるだろうか」と少し心配になり始めた頃、ついに産卵が始まりました。水しぶきを上げながら、メスの放卵に合わせてオスたちが放精する様子を、こどもたちは間近で観察することができました。また、1個体（おそらくメス）を複数の個体（おそらくオス）が追いかける姿も見られ、産卵の現場ならではの活発な行動を知ることができました。

今回の観察は、季節の移り変わりや潮の満ち引きといった目には見えない自然のリズムを巧みに利用しながら、生きものたちが地域で暮らしていることを実感する貴重な機会となりました。

こどもたちの感想

観察後、子どもたちからは驚きや感動の声だけでなく、生き物への新たな興味や疑問も数多く聞かれました。その一部を紹介します。

「たくさんのクサフグが集まって、一生懸命に命をつないでいることに感動した。」

「命がけで陸の近くまで来て産卵する理由や、数を増やすための工夫があることを知り、生き物はすごいなと思った。」

「クサフグのオスメスの違いを見分けてみたい。」

「クサフグの赤ちゃんはまだ見たことがないので、今度は卵や赤ちゃんも見たい。」

こぼれバナシ

初夏の風物詩のひとつであるクサフグの産卵。一般的には、5月から7月頃の大潮前後、夕暮れ時に見られることが多く、満潮時刻の2時間ほど前から始まり、満潮までには終わるとされています。ところが、江田島市では午前中の満潮時刻前後にも産卵が見られることが分かっています。このような産卵パターンは全国的にも珍しいとされており、江田島ならではの特徴といえるかもしれません。同じ種類の生き物でも、地域の環境や条件によって行動の仕方が異なることがあります。自然の営みには、教科書だけでは分からない「地域ごとのルール」がかくされているのかもしれません。こうした発見もまた、地域の自然を調べ続ける楽しさの1つです。

ビオトープフォーラム in 広島 2026

「山・川・海と人がつなぐネイチャーポジティブ時代の環境保全のあり方」

～平山専門員が座談会に登壇～

6月12日（金）、生物多様性保全やビオトープを全国に広めることなどを目的とした「ビオトープフォーラム in 広島 2026」が広島市で開催されました。会場では、ビオトープづくりに関わる方々の活動報告のほか、広島大学総合博物館の清水則雄准教授や、広島大学の海野徹也教授による講演が行われました。座談会には平山専門員も登壇し、「ネイチャーポジティブを实践するには」をテーマに、大学教員、学生、市民団体など、さまざまな立場の方々が意見を交わしました。

ビオトープは、造っただけで完成ではありません。生き物の様子を観察しながら、人が適切な手入れを続けることで、生物多様性を守り、より豊かにしていくことができます。一方で、活動を長く続けるためには、自然を守るための知識や技術を次の世代へ伝え、新たな担い手を育てることが課題となっています。

フォーラムでは、大人になってから自然に関心を持つかどうかには、子どものころをはじめとする過去の自然体験が大きく関係しているという話がありました。実際に生き物を見たり、触れたり、調べたりした経験が、自然を大切にする気持ちにつながると語られていました。また、人の手によって、本来その場所にいなかった生き物が持ち込まれ、生態系に悪い影響を与えた事例も紹介されました。自然を守るための活動であっても、生き物のくらしや、生き物どうしのつながりを十分に理解していなければ、かえって環境を損なう場合があります。自然について正しい知識を学ぶとともに、それを伝えることの大切さが語られました。

今回のフォーラムを通して、自然を大切にするためには、正しい知識を身につけること、自然を体験する機会をつくること、そして活動を次の世代へつないでいくことが重要だと感じました。



座談会の登壇者

展示も行いました！



展示の様子



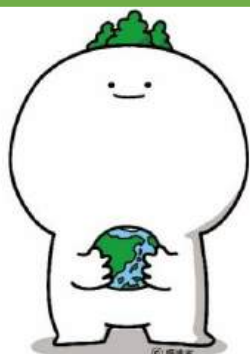
カブトガ三の展示

～～～～ 今回のテーマとなった2つの言葉 ～～～～

生き物のくらす場所「ビオトープ」

ビオトープとは、生き物がくらす場所のことです。

「ビオトープ」はドイツ語で、生き物を表す「ビオ」と、場所を表す「トープ」を組み合わせた言葉です。池や川、草地、林、干潟など、生き物が食べ物を取り、休み、子どもを育てられる場所を指します。学校や公園に造られた池をビオトープと呼ぶことがありますが、池だけではなく、草むらや林、水路なども、昆虫や鳥、カエルなどにとって大切なビオトープです。そこでは、植物を虫が食べ、その虫をカエルや鳥が食べるなど、さまざまな生き物がつながってくらしています。



ネイチャーポジティブ
イメージキャラクター
「だいだらボジー」

自然を回復させる「ネイチャーポジティブ」

「ネイチャーポジティブ」とは日本語訳で「自然再興」といい、「自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる」ことを指します（環境省ホームページより）。今、地球では生き物がとても速いペースで減っています。ネイチャーポジティブとは、自然を守るだけでなく、社会やくらしのしくみも見直し、自然や生き物を増やしていこうという考え方です。

やってみよう 見てみよう

「本の中の海」の巻

雨の日が多く、海辺で生き物を探したり、波の音を聞いたりする機会も少なくなる季節ですね。そんな時は、屋内で本を開いて、物語の中から海を感じてみませんか。今回は、江田島市にゆかりのある山下明生さんの作品を紹介します。

海のしろうま 山下明生：作

父を亡くした少年。荒れる海の白波を白うまと思い、白うまが自分をたずねてくると信じていた。するとある日出会ったのは…。(出版社からの紹介)

海を舞台に、海的美しさと恐ろしさ、祖父と孫との絆・家族を思う気持ちを、豊かな表現で幻想的に描いた物語です。(1973 年野間児童文芸推奨作品賞 受賞作品)



注目ポイント その1

白波を「しろうま」に見立てる表現

祖父は少年に、沖に見える白波を「しろうま」と呼ぶことを教えます。白波を「しろうま」に見立てることで、海は単なる風景ではなく、力強く駆け回る生き物のように感じられます。また、海を美しいだけでなく、神秘性や恐ろしさをあわせもつ存在としてとらえることができます。

注目ポイント その2

登場人物によって異なる海の見え方

海は、見る人の経験や気持ちによって違って見えます。例えば、少年にとっての海は想像や憧れにつながる場所でも、漁師にとっては生活の場であり、同時に危険がともなう場所でもあります。

物語では「しろうま」の見え方などを通して海の風景描写に人物の気持ちの違いが表れています。

文学作品は、生物図鑑や理科の教科書とは違います。しかし、物語の中にでてくる海の表現を手がかりにすると、舞台となる海的环境やそこに出てくる生き物のくらしを想像することができます。作品を通して、海の見え方や、海で働く人々の暮らしを考えてみてはいかがでしょうか。

作者が感じた海と、自分が知っている海を比べながら読むと、物語の世界がさらに広がります。

◆ 他にもあるよ!! Let's Try! ◆

児童文学作家：山下 明生（やました はるお）

山下明生さんは東京で生まれ、幼少年期を江田島市で過ごしました。実家ではイワシ網漁が営まれており、家族の仕事が終わるのを待つため、毎日のように漁港へ通っていたそうです。そこで目にした海の風景や、漁師たちとの会話、海とともに暮らした経験は、『海のしろうま』をはじめ、多くの作品に色濃く反映されていると考えられます。山下さんの半自伝児童文学とわれる『海のコウモリ』『カモメの家』『ガラスの魚』三部作をはじめ、『島ひきおに』や『はじめてのうみ』など、島や海を身近に感じられる作品を数多く手がけています。また、翻訳家としても活躍され、代表的な翻訳作品として「バーバパパ」シリーズが知られています。



◆ 第215回自然観察会 ◆

大きなハサミで、でっかくアピール!

河口干潟では、巣穴から出てきたハクセンシオマネキやチゴガニなど、スナガニ科のカニたちが活発に活動する季節です。オスのカニはハサミをふって、まるでダンスをしているかのような行動を見せます。カニの種類によって動き方が違うので、見比べてみると発見がいっぱいです。

カニの巣穴や砂団子などを手がかりに、河口干潟にすむ生き物たちを探します。小さなカニたちのかわいらしい動きから、干潟の生き物のくらしをのぞいてみましょう。

日 時：令和8年7月18日（土）
16:00～18:00
（干潮時刻 18:27 +41cm）

集 合：さとうみ科学館（16:00）

観察場所：大柿町深江 島戸川河口干潟

申し込み：令和8年7月16日（木）までに



申込用
QRコード

LINE 申込フォームまたは電話にて事務局
へお申し込み下さい。



☆持ってくるもの☆

○ぼうし ○軍手 ○長靴

○水筒（飲み物）○タオルなど

潮見表 7月の観察に適した日時（干潮時刻と潮位）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
曜日	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	
時分	4:33	5:07	5:42	6:18	6:55	7:36	8:20	9:12	10:16	11:28	0:22	1:38	2:39	3:30	4:16	
cm	139	134	129	124	119	115	110	104	96	81	176	170	157	143	129	
時分	16:30	17:06	17:42	18:18	18:56	19:37	20:24	21:24	22:48		12:38	13:43	14:41	15:34	16:22	
cm	40	40	43	52	67	89	116	146	169		61	39	18	3	-4	
	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜日	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
時分	4:58	5:39	6:19	6:58	7:38	8:20	9:10	10:16	11:36	0:57	2:02	2:44	3:18	3:48	4:17	4:48
cm	117	107	101	99	101	106	113	118	116	203	188	171	156	143	131	119
時分	17:06	17:48	18:27	19:05	19:43	20:25	21:22	23:07		12:46	13:43	14:29	15:09	15:45	16:19	16:52
cm	1	16	41	75	113	151	185	206		106	91	75	60	48	39	36

cmの数字が小さいほど、よく潮が引きます。

令和8年 潮汐表（海上保安庁）から

潮位30cm未満（白抜きの文字）が調査に適しています。

事務局だより

●中国新聞で紹介されました!

（6月4日付）1ページで紹介した「クサフグの産卵観察会」の記事。市内小・中学校で取り組まれている「さとうみ学習」。地域の教育資源「里海」を活用した本市ならではの特色ある教育について知っていただく機会になったのではないかと思います。

（6月7日付）さとうみ科学館の来館者数が増加しているという記事。休日開館の実証実験・「大人のための科学クラブ」など、新たな利用者層の開拓に向けた館の取組を紹介していただきました。これからも、子どもから大人まで、「来てよかった」「また来たい」と思ってもらえるさとうみ科学館づくりに取り組んでいきたいと思ひます。

なお、2つの記事については、中国新聞電子版でもご覧いただけます。

●休日開館日（7月）のお知らせ

7月も毎週土曜日を開館。開館時間は9:30～17:00（入館は16:30まで）です。詳しくは事務局まで。

江田島市教育委員会 教育部 大柿自然環境体験学習交流館

さとうみ科学館

Satoumi Science Museum (SSM)

〒737-2214

広島県江田島市大柿町深江1073番地1

TEL: (0823) 57-2613

FAX: (0823) 40-3100

メール: satoumimail@yahoo.co.jp

HP: 『さとうみ科学館』で検索

◆事務局スタッフ◆

館 長：西原 直久

専 門 員：平山 良太

主 任：鎌崎 賢三

運営指導員：下中 茂樹

運営指導員：加島 茂樹

支 援 員：木村 さつき

里海コーディネーター：向井 綾香



（友の会会員）

シニア 182名

ジュニア 143名

◆あとがき◆クサフグの産卵は数日間観察されることが多いのですが、予想とは異なり6月1日の前後では産卵が確認されませんでした。身近な生き物であっても、生態はまだ分かっていない場合も多く、今回の観察は、そのことを改めて知る機会にもなりました。（鎌崎）